

# マラプロピズムの形態的・語彙的分析\*

吉 田 明 子

## 1. はじめに

言葉の誤用とは通常、話し手が無意識に語を言い間違えることによって起こる現象である。しかし、誤用の中には故意に言い間違いを犯すことで笑いを誘う種類のものがある。この種の誤用に当てはまるものがマラプロピズム (malapropism) である。

マラプロピズムとは、ある語を発する際に、綴りや発音の類似する別の語、もしくは全く意味が異なる語に言い間違えることで、面白さや皮肉・ユーモア等の効果をもたらす誤用である。OED<sup>2</sup>でマラプロピズムを調べると、“Ludicrous misuse of words”と定義付けされている。名称の由来は、シェリダン (Richard Brinsley Sheridan, 1751-1816) の喜劇である *The Rivals* (1775年) に登場する、マラプロップ夫人 (Mrs. Malaprop)<sup>1</sup>からきている。彼女は以下のような言い間違いをしてしまう。(登場人物以外の斜体はマラプロピズムの部分であることを示す。以後、同様。)

---

\* 本稿は第24回年次大会 (2014年3月3日、於：東京外国語大学本郷サテライト) での研究発表内容の一部に加筆・修正を施したものである。本稿の完成にあたり、編集委員長の野村忠央先生 (北海道教育大学旭川校)、そして匿名の査読委員のお二方には、内容や書式に関する丁寧かつ有益なご助言・ご指摘を頂いた。この場を借りて、深く感謝申し上げる。残る不備・遺漏は筆者一人に帰せられるべきものである。

- (1) *Mrs. Malaprop*. Sir, you overpower me with good-breeding. [*Aside*] He is the very *pineapple* of politeness! ... (The Rivals 3. 3. 22-23)

上記の *pineapple* (パイナップル) は正しくは *pinnacle* (頂点) であり、この言い間違いがマラプロピズムとなる<sup>2</sup>。この現象はマラプロップ夫人に限ったことではなく、16世紀にすでにシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の劇作品に多く登場している。マラプロピズムについて、梅田 (1989: 12) は「シェリダンより前にシェイクスピアにすでに現れており、無教養な愚か者がよく使って観客を笑わせている」と述べている。

本稿では、*The Rivals* とシェイクスピア劇作品で使用されるマラプロピズムに焦点を当て、マラプロピズムに使用される語の特徴を形態的・語彙的に分析することを目的とする。さらに分析を通し、マラプロピズムが観客の言語的教養を測るための言語装置としての役割を果たしていると主張する。

## 2. マラプロピズムという現象

劇作品で使用されるマラプロピズムは、意図的な言い間違いによって観客の笑いを誘う誤用であるため、その意図は作家によって仕掛けられている。つまり、作品における言語的な技法として作用している。*Webster's Dictionary of English Usage* (以下、*WDEU*) は、マラプロピズムについて次のように説明している。

- (2) So we have two kinds of malapropism—the deliberate confusion of hard words for humorous effect that has been used by writers from Shakespeare's time and before, and inadvertent malapropisms committed by people not trying to be funny. Unconscious malapropisms are undoubtedly more common in speech than in writing. (620)

*WDEU*によれば、マラプロピズムには、二種類あり、一つにはシェイクスピア時代前後の作家が、喜劇的な効果をねらうために、故意に難語を混同させる種類のものと、もう一つには、人々が面白がらせるつもりがなく

不注意で誤りを犯す種類のものがある。後者の無意識によるマラプロピズムは、書き言葉よりも明らかに話し言葉においてよく見られるとしている。両者のうち、劇作品で使用されるマラプロピズムは前者で、登場人物はうっかり言い間違いをしてしまうが、それは作家によって意図的に仕掛けられた面白さである。この点が後者との違いである。鈴木 (2011: 11) は、「マラプロピズムは、詩人・作家による文字上の戦略なのである」と述べている。

では、作家たちはどのような意図でもってマラプロピズムを作品中で使用しているのだろうか。本節では、どのような語彙がマラプロピズムとして使われ、どんな特徴を持ち合わせた登場人物がマラプロピズムを犯すことになってしまうのかを見ることにより、マラプロピズムの基本的な特徴の一端を明らかにする。

## 2.1. 語彙の特徴

マラプロピズムとして使用される語彙の種類は限定されており、その大半はラテン語やフランス語由来の多音節語である。その理由として、16世紀に起こった英語の語彙史上の出来事が挙げられる。16世紀は、外来語の急激な増加により新たに英語となった語彙が劇的に増えた。この過程においてマラプロピズムという現象が起こったのである。

1453年に起こった東ローマ帝国の滅亡により、学者たちがヨーロッパ各地に亡命し、そこからヨーロッパで古典学が生まれ、ルネッサンスが始まったことと、同時期に印刷技術の発展・普及により、フランス語やラテン語から英語への翻訳が盛んに行われたこと等が、英語の語彙の急激な増加とともにマラプロピズムの発生につながった (三輪 1995: 159)。16世紀以前に文学や聖書に使われていたのは、フランス語やラテン語が主で、ルネッサンスの影響により、フランス語・ラテン語で書かれている古典の英語への翻訳が盛んになり、この過程で大量の語彙の借用が起きたため、英語の語彙が飛躍的に増加した (永嶋 2009: 244)。

さらに印刷技術の普及・発展により、翻訳された英語の書物が多くの人々によって読まれていたため、当時は上流階級だけでなく、下層階級の人々も、特にフランス語・ラテン語からの借用により英語についてある程度の知識があったと思われる。このような歴史的背景の中で、下層階級の人々が自分の学識者ぶりをひけらかそうとした際に、フランス語やラテン語な

どから新たに英語の語彙となった借用語を会話で使用した結果、正確な知識がなかったために、言い間違いを犯し、混乱が起きてしまったことがマラプロピズムの始まりであると考えられる（詳しくは、三輪（1995: 159-164）を参照）。

## 2.2. 登場人物の特徴

ルネッサンス期に実際の言語現象として、人々、特に無教養な人々の間で起こったマラプロピズムは、当時の作家たちによって文学的技法として使用されることになる。この点について Blank (2006) は、以下のように説明している。

- (3) The drama of the period, including Shakespeare's plays, is full of comic characters who cannot command the 'new' English, and who are ridiculed for their attempts to do so. (Blank 2006: 279)

作家たちは喜劇において、コミック効果を発揮させるために、無教養で社会的身分の低い登場人物を笑いの対象とし、彼らにマラプロピズムを犯させている。シェーラー（1990: 123）によれば、「エリザベス朝時代の戯曲において愛用された言葉のおかしみの表現手段は、無教養の平民を代表する者たち（従者、職人、警吏など）にロマンス語系の多音節語をとりちがえたり歪めたりして」、言い間違いをさせている。シェイクスピア劇作品でマラプロピズムを犯す登場人物の代表は、『ヘンリー四世Ⅱ部』(*The Second Part of Henry the Fourth*, 1597-8年)に登場する酒亭の女将のクイックリー夫人 (*Mistress Quickly*) や、『恋の骨折り損』(*Love's Labour's Lost*, 1594-5年)の田舎者コスタード (*Costard*)、『空騒ぎ』(*Much Ado About Nothing*, 1598-9年)の警吏ドッグベリー (*Dogberry*) である<sup>3</sup>。この特徴は *The Rivals* のマラプロップ夫人にも引き継がれている。彼女は「教養を気取って故意にむずかしい長い語」(大塚・中島 1982: 691)を言い間違えてしまう。

当時の作家たちは、教養のない身分の低い登場人物にあえて上流階級や知識階級が使用するような難解な単語を言い間違えさせること、つまりマラプロピズムを犯させるというテクニクを用いて笑いやユーモア、時には皮肉等を表現していたということになる。

以上のように、本節では、マラプロピズムとして使用される語彙、そしてマラプロピズムを犯す登場人物の特徴に触れ、その基本的な特徴の一端を明らかにしてきた。マラプロピズムとして使用される語の大半は、16世紀にラテン語・フランス語からの借用により新たに英語となった語彙である。また、マラプロピズムを犯してしまうのは、無教養で社会的身分の低い登場人物たちである。その要因として、ルネッサンス期に下層階級に属する無知な人々が、実際の会話において、博識ぶって難語を言い間違えるという混乱があったことが挙げられ、これがマラプロピズムの始まりと考えられている。Blank (2006: 278)は、“It is of course possible that such widespread malapropism among the uneducated was a real phenomenon…”と述べている。当時の作家たちは、すでに現実世界で起こっていた言語現象であるマラプロピズムを、文学的な技法として演劇に取り入れたのである。

### 3. マラプロピズムの形態的側面

マラプロピズムはシェイクスピア等の作家によって、演劇という形式の中で使用されることにより、聞き手・観客を笑わせるという手法として取り扱われた。2.1節で述べた様に、マラプロピズムとして使用される語彙の種類は、ラテン語やフランス語経由の多音節語に限られているが、聞き手である観客は誰もがマラプロピズムとなる語彙について正確な知識を持っているわけではない。さらに、マラプロピズムとなる単語と正しい単語との両方の知識が観客の方になれば、言い間違いであることにも気付かれず、観客の笑いを誘うことはできない。

作家によって意図的に使用されるマラプロピズムから、その特徴である可笑しみやユーモアの効果を最大限に引き出すためには、何らかの規則性を持たせることが必要ではないだろうか。その規則性は、マラプロピズムとして使用される語の形態的側面によって説明づけることができると筆者は考える。本節では、シェイクスピア劇作品と*The Rivals*で使用されるマラプロピズムの形態的側面について、Schlauch (1987)と三輪 (1995)を扱い、論じていく。

### 3.1. Schlauch (1987) と三輪 (1995)

Slauch (1987) は、シェイクスピア劇作品で使用されるマラプロピズムを調査したところ、マラプロピズムに使用される語は形態素に従い、下記のように接頭辞・接尾辞・語根の違い、あるいは脱落によって分類が可能であるとしている。

- (4) a. Prefixes confused or omitted
- b. Suffixes confused, omitted or distorted
- c. Roots (homonymous or phonetically similar) confused

(Schlauch 1987: 92-5)

Slauch (1987: 92) によれば、“The confusion of morphemic elements, notably in words of Latin-Romance origin, is the source of an especially large group of malapropisms”としており、形態素に従った分類が可能であることが分かる。Schlauch (1987: 96) によると、(4) における分類の中で最も頻度が高いものが、a で 28 例存在する。次に、b で 21 例、c で 22 例となっていて、両者はほぼ同数である。

Slauch (1987) の形態素によるマラプロピズムの分類をより細分化し、網羅的に例を収集し、図表化を試みたものが三輪 (1995) である。三輪 (1995: 164) は、マラプロピズムにはある一定の間違え方の規則があるとし、その規則を「間違え方の方程式」と称している。そして、登場人物はこの「間違え方の方程式」に基づいてマラプロピズムを犯し、観客は作者の意図を理解して笑うと述べている。以下に Schlauch (1987) による分類と、三輪 (1995) による分類とを、筆者がまとめた表を示す。

(5)	Slauch (1987) <sup>4</sup>		三輪 (1995)
1	接頭辞の違い／脱落 (28 例)	A	接頭辞の違い (34 例)
		B	接頭辞の脱落 (15 例)
2	接尾辞の違い／脱落／変形 (21 例)	A	接尾辞の違い (26 例)
		B	接尾辞の脱落 (8 例)
3	語根の違い (22 例)		語根の違い (61 例)

Schlauch (1987) において、3パターンに分けられていた分類は、三輪 (1995) では細分化され5パターンとなっている。本稿では、この5パターンを1-A型 (接頭辞の間違い)、1-B型 (接頭辞の脱落)、2-A型 (接尾辞の間違い)、2-B型 (接尾辞の脱落)、3型 (語根の間違い) とする。それぞれの型の例文を以下の (6)–(10) に示す。

(6) *Lancelot... and so now I speak my agitation of the matter, ...*  
(*The Merchant of Venice* 3. 5. 3-4)

(6) の *agitation* (興奮・扇動) は、*cogitation* (思考) のマラプロピズムであり、それぞれの接頭辞が入れ替わっている。

(7) *Dogberry. No, thou villain, thou art full of piety, ...*  
(*Much Ado About Nothing* 4. 2. 76)

この *piety* (信心) は *impiety* (不信心) のマラプロピズムであり、否定の接頭辞 (negative prefixes) である *im-* が脱落することで、結果的に反対の意味を表すことになる。Schlauch (1987: 92) は、“Omission or addition of the negative prefix sometimes results in a simple inversion of meaning into its opposite...” と述べている。

(8) *Dogberry. First, who think you the most desertless man to be constable?*  
(*Much Ado About Nothing* 3. 3. 8-9)

*desertless* は正しくは *deserving* (～に値する) であり、接尾辞の *-ing* が *-less* と入れ替わったためにマラプロピズムとなっている。

(9) *Quince. A lover, that kills himself most gallant for love.*  
(*A Midsummer Night's Dream* 1. 2. 20)

*gallant* は正しくは *gallantly* (勇ましく) で、接頭辞の *-ly* が脱落したことでマラプロピズムとなっている。

(10) *Mistress Quickly*. I beseek you now, *aggravate* your choler.

(2 *Henry IV* 2. 4. 158)

語根の間違いはシェイクスピア劇作品で使用されるマラプロピズムで例が最も多い。aggravate（悪化させる）は、alleviate（軽減する・緩和させる）のマラプロピズムであり、同様のマラプロピズムを『夏の夜の夢』の織工ボトムと『ウインザーの陽気な女房たち』のクイックリー夫人も犯している（三輪（1995: 168）参照）。

### 3.2. シェリダンのマラプロピズム

三輪（1995: 170）は、Schlauch（1987）による、シェイクスピア劇作品で使用されるマラプロピズムの分類を基盤とし、より多くの例文を収集・細分化した「間違え方の方程式」は、シェリダンの*The Rivals*（1775年）にも当てはめることが可能だと述べている。三輪（1995）による、*The Rivals* で使用されるマラプロピズムの分類を（11）に示す。

(11)

		三輪（1995）	
1	A	接頭辞の間違い	(21例)
	B		
2	A	接尾辞の間違い	(4例)
	B		
3		語根の間違い	(29例)

三輪（1995）の調査によれば、*The Rivals* で使用されるマラプロピズムには、1-B型（接頭辞の脱落）と2-B型（接尾辞の脱落）の例は見当たらなかった（分類の型については、(5)を参照）。また、例文の割合も1-A型（接頭辞の間違い）と3型（語根の間違い）が大部分を占めており、2-A型（接尾辞の間違い）は、4例と極端に少ないことがわかる。

以上のように、本節では、シェイクスピア劇作品と*The Rivals* で使用されるマラプロピズムについて形態素に基づいた分類を用いることで形態的側面からの分析を試みた。シェイクスピア劇作品と*The Rivals* において、形

態素に基づいた分類、あるいは三輪（1995）がいうところの「間違え方の方程式」を利用することで、マラプロピズムに規則性が生まれる。そのため観客は、登場人物が言い間違いを犯したことに気づき、マラプロピズムに仕掛けられた言葉の滑稽さを理解することが容易になると考えられる。そして、この仕組みは*The Rivals*で使用されるマラプロピズムよりも、シェイクスピア劇作品で使用されるもののほうがパターンが多く、豊富に見られる。

#### 4. マラプロピズムの語彙的側面

前節では、マラプロピズムの形態的側面を扱ったが、シェリダンの*The Rivals*では、形態素に基づいた分類のパターンがシェイクスピア劇作品のものよりも少なかった。このことから、形態素に基づいた分類だけでは、観客はマラプロピズムの滑稽さを理解できないのではないかという考えに筆者は至った。そこで本節では、マラプロピズムに使用される語彙の分析を試みる。

##### 4.1. 専門用語の使用

Schlauch (1987)によれば、シェイクスピア劇作品で使用されるマラプロピズムには、例えば、次のような特定の専門領域に関する用語が含まれている（詳しくは、Schlauch (1987: 84-7)を参照）。

- (12) a. Religion
- b. Legal parlance
- c. Medical science
- d. School Latin
- e. The transformation of certain names from classical history and mythology

下記の例文において、『空騒ぎ』の警吏のドッグベリーは夜警たちと擬似裁判劇を繰り広げる中で、法律用語をマラプロピズムとして使用している。

- (13) *Dogberry*. Is our whole *dissembly* appeared?  
*Verges*. O, a stool and a cushion for the *Sexton*.  
*Sexton*. [*sits*] Which be the malefactors?

(*Much Ado About Nothing* 4. 2. 1-3)

Schlauch (1987: 85)によると、*dissembly* は *assembly* (議会) のマラプロピズムである。彼は警吏であるにも関わらず、法律家を気取って擬似裁判を執り行おうとしてしまい、その結果、専門用語を言い間違えてしまうところに可笑しさが生まれている。山畑 (2004) は次のように述べている。

- (14) こうした滑稽な人物による法への言及は観客層の中に宮廷人や法曹学院の子弟、大学生など、一部知的上流階級層が組み入れられてきた傾向とおそらく無関係ではないと考えられる。 (山畑 2004: 128)

法律用語に限らず、専門用語がマラプロピズムとして使用されるのは、その専門領域の知識が豊富な知識階級や上流階級の観客をターゲットにすることで、そのような特定の観客のみをマラプロピズムに気付かせて笑わせる作者側の意図があったのではないだろうか。この傾向は、シェリダンの *The Rivals* にも多く見られる。

- (15) a. *Mrs. Malaprop*... I would have her instructed in *geometry*...  
(*The Rivals* 1. 2. 222)  
b. *Mrs. Malaprop*... she should be mistress of *orthodoxy*, ...  
(*The Rivals* 1. 2. 224)

(15a) の *geometry* (幾何学) は、*geography* (地理学) のマラプロピズムで、(15b) の *orthodoxy* (正教) は、*orthography* (正書法) のマラプロピズムである。マラプロップ夫人もまた、学を銜うあまり専門用語を言い間違え、マラプロピズムを犯してしまう。

#### 4.2. 反意語の使用

シェイクスピア劇作品で使用されるマラプロピズムには、特有の意味的

な特徴が見られる。それは反意語（antonyms）がマラプロピズムとして使用されているか、あるいは文脈上反対の意味に解釈できるというものである。例文を下記に示す。

- (16) *Costard*. Lord, Lord, how the ladies and I have put him down!  
 O' my troth, most sweet jests, most inconvy *vulgar* wit!  
 When it comes so smoothly off, so *obscenely* as it were, so fit!  
 (*Love's Labour's Lost* 4. 1. 139-3)

*vulgar*（卑猥な）は、*refined*（上品な）のマラプロピズムであり、*obscenely*（猥褻に）は、*seemly*（相応しく）のマラプロピズムである。梅田（1989）は、コスタードがマラプロピズムを犯したために、本人が意図していることとは反対なことを言っていると述べている。

- (17) コスタードは、彼〔ボイエット〕を、フランスの淑女たちと一緒に、「上品な」機知で「ピタリと」洒落のめしたと自画自賛しているつもりである。しかし、実際には、「卑俗な（*vulgar*）」機知と、「猥褻なことばで（*obscenely*）」洒落た、と意図とは真反対なことを言っている。  
 （梅田 1989: 88）

また、Okamura (1986: 123) もマラプロピズムのタイプとして反意語を挙げており、“Many malapropisms of Shakespeare belong to this type<sup>5</sup>”と述べている。さらに、三輪 (1995: 169) においてもシェイクスピア劇作品で使用されるマラプロピズムには「正反対の単語を用いた特殊例」があるとしている。このように、反意語がマラプロピズムとして効果的に使用されており、マラプロピズムになる語と正しい語との意味の関連性から、観客に二重の意味で可笑しさを感じさせることが可能になる。

## 5. 言語装置としてのマラプロピズムの機能

これまで3節と4節を通して、シェイクスピア劇作品と *The Rivals* におけるマラプロピズムの特徴を、形態的側面と語彙的側面から分析を行ってきた

たところ、次のことが明らかとなった。

- (18) a. 形態素に基づいた規則性がみられる。  
b. 特定の観客に向けられた専門用語を使用している。  
c. 反意語の使用、あるいは反対の意味に解釈できる。

この分析結果から、筆者はマラプロピズムには観客の言語的教養の高さを試すための言語装置としての機能を果たしているという結論に至った。

Okamura (1986: 121-2) は、シェイクスピア劇作品で使用されるマラプロピズムには、“supplementary devices” が提供されており、そのため “Shakespeare’s malapropisms have a distinctive quality of being easily understood regardless of clues” と述べている。つまり、観客は特別な手掛かりがなくても登場人物が犯したマラプロピズムの可笑しさに気づき、滑稽さを感じることができると考えられる。

シェリダンの *The Rivals* (1775年) で使用されるマラプロピズムについては、Cordner (2008) が、マラプロップ夫人が犯すマラプロピズムを理解するには、言語的洗練さを理解するための水準の高さが要求されると述べている。

- (19) ... being fully alert to all her mistaking requires a level of linguistic sophistication not likely to be possessed in equal measure by all those who watching the play. (Cordner 2008: x)

喜劇において、マラプロピズムは観客の笑いを誘うための手段として、16世紀にはシェイクスピア、そしてその約2世紀後にはシェリダンによって意図的に仕掛けられている。しかし、ただ言い間違えるだけでは、観客はその滑稽さに気づかない可能性がある。そのため作家は、言葉の滑稽な誤用と呼ばれるマラプロピズムの効果を最大限に生かすために、接頭辞や接尾辞の取りちがえ・脱落、あるいは語根の取りちがえに限定させることで規則性を持たせたり、観客の階級に合わせて専門知識になじみのある観客のみをターゲットにして笑わせたり、反意語を用いることにより登場人物が本来言わんとしていた言葉と反対の意味だと観客に気付かせるような

工夫を施したのである。このように一種の言語装置としてマラプロピズムが作品中で機能を果たしていたからこそ、観客はマラプロピズムに込められた言葉の可笑しさやユーモアが理解できたという満足感を得ていたと考えられる。

## 6. おわりに

本稿では、シェイクスピア劇作品とシェリダンの *The Rivals* (1775年) で使用されるマラプロピズムの特徴を形態的側面と語彙的側面という2つのアプローチから分析を試みたところ、マラプロピズムは観客の言語的教養を試す言語装置としての機能を果たしているという結論に至った。言語装置としてマラプロピズムが機能していることを明らかにするためには、形態的側面・語彙的側面の両方を踏まえた分析が必要であると筆者は考える。

しかし、シェイクスピア劇作品と *The Rivals* では、言語装置としてのマラプロピズムを使用する目的に違いが見られる。シェイクスピア劇作品では、あらゆる階層の観客が理解しやすくするためにマラプロピズムが機能しているようだが、*The Rivals* においては、マラプロピズムの可笑しさを理解するための言語的教養の高さがシェイクスピア劇作品のものよりも高いのではないだろうか。この点を明らかにするのが今後の課題である。

### 注

1. malaprop は、フランス語の *mal à propos* (= unsuitable, inopportune) が語源である。
2. 八木 (2006: 701) によれば、誤用された語を malaprop(ism) という。
3. その他の登場人物は、『ウインザーの陽気な女房たち』のクイックリー夫人、スレンダー、『夏の夜の夢』の織工ボトム、『ヴェニスの商人』のラーンスロット・ゴボウ、『ハムレット』の墓掘りの道化、『アントニーとクレオパトラ』の道化等である (梅田 (1989: 13-4) 参照)。
4. (5) の Schlauch (1987) の分類の邦訳は筆者によるものである。
5. Okamura (1986: 122-126) によると、シェイクスピア劇作品で使用される、反意語 (antonyms) のマラプロピズムの例は、26例である。

## テキスト

- Sheridan, Richard Brinsley. *The School for Scandal and Other Plays*. Michael Corder (ed.) (2008). Oxford: Oxford University Press.
- Shakespeare, William. *William Shakespeare: The Complete Works*. Stanley Wells, Gary Taylor, John Jowett, and William Montgomery (eds.) (2005) Oxford: Clarendon Press.

## 参考文献

- Blank, Paula (2006) “The Babel of Renaissance English.” In Lynda Mugglestone (ed.) *The Oxford History of English*, 262-297. Oxford: Oxford University Press.
- Corder, Michael (2008) “Introduction.” In Michael Corder (ed.), *The School for Scandal and Other Plays*, vii-xlv. Oxford: Oxford University Press.
- 三輪伸春 (1995) 「シェイクスピアとシェリダンのマラプロピズム」『英語の語彙史——借用語を中心に』、159-175. 東京: 南雲堂.
- 永嶋大典 (2009) 「『英語辞典』」江藤秀一・芝垣茂・諏訪部仁編『英国文化の巨人 サミュエル・ジョンソン』、243-260. 鎌倉: 有限会社港の人.
- Okamura, Toshiaki (1986) “Shakespeare and Malapropisms.” 『鳥取大学教育学部研究報告. 人文社会科学』 第37巻1号、119-127. 鳥取大学研究成果リポジトリ. オンライン資料. 2012年9月27日. <<http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/Repository/metadata/2080>>
- 大塚高信・中島文雄編 (1982) 『新英語学辞典』 東京: 研究社.
- シェーラー、マンフレート (1990) 『シェイクスピアの英語—言葉から入るシェイクスピア—』 岩崎春雄・宮下啓三訳. 東京: 英潮社新社.
- Schlauch, Margaret (1987) “The Social Background of Shakespeare’s Malapropisms.” In Vivian Salmon and Edwina Burness (eds.) *A Reader in the Language of Shakespearean Drama*, 71-100. Amsterdam: John Benjamins.
- 鈴木雅光 (2011) 「誤用について」『日本英語英文学』 第21号、1-14.
- 梅田倍男 (1989) 『シェイクスピアの言葉遊び』 東京: 英宝社.
- 山畑淳子 (2004) 「Shakespeare 喜劇の新しい局面へ: *Much Ado About Nothing* 小論」『埼玉女子短期大学研究紀要』 第15号、113-133. 学術情報発信システム SUCRA. オンライン資料. 2012年9月27日. <<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php?id=SJ-KJ00000741985>>
- 八木克正 (2006) 「Malapropism」小西友七編『現代英語語法辞典』、701-702. 東京: 三省堂.

**辞書**

*OED*<sup>2</sup>: *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition, 1989.

*WDEU*: *Webster's Dictionary of English Usage*. 1989.

(東洋大学大学院生)  
s41801300018@toyo.jp